# 目　次

## 広島大学マスターズ１０年の歩み


ごあいさつ　渡部　和彦（代表幹事）…… 1
広島大学マスターズの創立１０周年を祝して　藏田　義雄（東広島市長）…… 2
広島大学マスターズ１０周年を祝して　越智　光夫（広島大学長）…… 3


## 広島大学マスターズ創立１０周年によせて


広島大学マスターズの歩み（創立～ 2011 年度）　金田　　晉（前代表幹事）…… 5
創立１０周年記念シンポジウム・祝賀会について　渡部　和彦（代表幹事）…… 9
広島大学マスターズ創立１０年に寄せて　清水迫 章造（協力会員）…… 12
広大マスターズ創立にあたっての余話　菅川　健二（会員）…… 14
広大マスターズと地域貢献　髙田　忠彦（会員）…… 15


## 事業別１０年の歩み


広島大学マスターズの企画事業…… 17
「例会」・「懇親会」・「広島大学マスターズ主催講演会」・「海外研修旅行」
広島大学への教育支援…… 23
教養教育「平和科目」・「日本語・日本文化短期特別研修」・
「日韓共同理工系留学生予備教育」
東広島市への協力・支援…… 27
「市民講座・出前講座」・「地域課題研究支援」
地域生涯学習への支援…… 30
「テレビ新広島文化大学」・「ちゅーピーカルチャーセンター」
広報活動…… 32
「ＨＭ通信」、「ホームページ」、「パンフレット」、「ロゴ」、「旗・ペナント」
連携団体…… 35
「広島大学マスターズ広島」・「広大マスターズ友の会」
その他の活動…… 36

## 「HM 通信」の記事から

「東広島市生涯学習フェスティバルに出展しました」（９号より）…… 37
「ワークショップ：子どもの放課後を考える」（１４号より）…… 38
「市民講座：子と親のための『のっぱら探検講座』」（１４号より）…… 39
「新年のご挨拶」・「学長表彰について」（２１号より）…… 41
「ごあいさつ」（２３号より）…… 43

## 資料編

会則・趣意書…… 45
歴代役員一覧…… 49
年表…… 50
各種行事・事業のリスト…… 51
「市民講座」・「出前講座」・「TSS 文化大学」・「ちゅーピーカルチャーセンター講座」

# 広島大学マスターズ
# １０年の歩み

# ごあいさつ

**渡　部　和　彦**
**（広島大学マスターズ代表幹事）**

「広島大学マスターズ」創立10周年を記念する記念誌の出版にあたり、一言ご挨拶申しあげます。「広島大学マスターズ」の発足の動機は、東広島市、地元有志、広島大学退職教員有志が相集い、市からの要請もあり、東広島市民の文化的レベルの向上に微力を尽くしたいとの思いがありました。また、広大での教職員の経験を元に、何らかの形で地元に貢献できる活動を主体的に始めようとの熱意からでもあります。いくつかの案の中から、その名称が「広島大学マスターズ」と決められた理由には、次のような思いからのようです。大学卒業後に大学院があるように、大学院「マスターコース」に入る気持ちで取り組もうとの理由の他に、ゴルフの「マスターズ」に因み、現役時代ほどは飛ばせないものの、それなりの努力で社会貢献をしたいとの思いが込められていたとのことです（金田晉先生談）。

さて、学園都市東広島の新しいキャンパス構築のため、工学部が最初に移転してから早くも34年が経ちます。学校教育学部、法学部、経済学部の最後の移転から数えて、21年が経過しました。広大マスターズは、広大の移転完了の約10年の後（2006年12月2日）にスタートしたことになります。

これまでの10年間を振り返ると、諸先輩による会の立ち上げと、使命感に裏付けられた、全国の大学でも他に例のない取り組みが、精力的かつ組織的に行われました。これらの活動は、「挑戦」と「基礎作り」の時期と名付けることが出来るでしょう。その一つの区切りは、設立5年後の「広島大学長表彰（2011年11月）」の栄に浴した時と考えられます。最近は、「マスターズ」の知名度も若干向上し、海外研修等、新企画を含め、「充実期」に入った感があります。

現在における広大マスターズの活動対象（領域）は、次の4つに大別されます。①広大との連携・協力：（「平和科目」、「留学生教育」への協力、など）、②地域との連携・協力：（東広島市「市民講座」、「出前講義」、「TSS文化大学」、「ちゅーピーカルチャーセンター」への講師派遣、「広大マスターズ講演会」、ケーブルTVでの公開講座、など）、③自主的活動：（「市民向けHP「瓦版」」、「出前授業」、など）、④会員の交流：（「ＨＭ通信」、「会員向けHPの発信」、「ウオーキング大会」、「例会」、「総会」、「懇親会」、「海外研修旅行」、など）。海外研修旅行は、旅行会社との協力で、訪問先の大学で講義を受講するなど独自の内容構成です。また、市民講座参加者等から成る「広大マスターズ友の会」の発足により市民との連携・協力活動を深めています。

我々、広大マスターズは、広大を含む、４つの大学を擁する東広島市を中心に活動しています。東広島市が学園都市としての魅力を一層高められ、更なる発展の為、引き続き微力ながら貢献したいと願っています。大学との連携活動も重要に位置づけています。今後とも、関係組織、機関等の皆様および市民の皆様からの一層のご支援、ご協力、ご鞭撻を衷心より願い、挨拶といたします。

# 広島大学マスターズの創立10周年を祝して

東広島市長　　藏　田　義　雄
（広島大学マスターズ顧問）

広島大学マスターズが創立１０周年を迎えられ、記念誌を発刊するにあたり心よりお祝いとお慶びを申し上げます。

平成１８年の創立以来、常に市のため、市民のために温かい心遣いを持って献身的に活動いただいておりますことに対し、厚くお礼を申し上げます。

また、こうして１０周年を迎えられましたのも、代表幹事の渡部様をはじめ関係者の皆様方の並々ならぬご熱意とたゆまぬご努力の賜物と深く敬意を表する次第であります。

さて、近年、グローバル化や少子高齢化の進行など、社会情勢が大きく変化し、市民の学習に対するニーズも多種多様となっております。また、それに伴い、市民一人ひとりが生涯にわたって主体的・継続的に学び、必要とする様々な力を養い、その成果を社会に生かすことのできる社会が求められています。

こうした中、本市におきましては、「市全体を、学びのキャンパスに」を目標に、大学や研究機関等との連携により、市民にあらゆる学習支援サービスを提供する東広島市生涯大学システムの構築に取り組んでいるところでございます。

広島大学マスターズの皆様におかれましては、東広島市生涯大学システム運営協議会に加盟していただき、「地域の生活・文化レベルの向上」、「知の地域貢献」という崇高な理念のもと、広大マスターズ市民講座や出前講座など、高度で専門的な知識を活用した多様な学習機会を提供していただき、本市の生涯学習推進の中核を担う存在として、積極的にその役割を果たしておられます。

本市といたしましても、市民の生涯にわたる能力開発と学びによる豊かなまちづくりの実現に向け、生涯学習事業の質的な充実に一層取り組んでまいる所存でございますので、引き続きご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

結びにあたり、広島大学マスターズが創立１０周年を契機とし、ますますご発展されますとともに、皆様方のご健勝、ご活躍を祈念いたしまして、お祝いのことばとさせていただきます。

# 広島大学マスターズ10周年を祝して

広島大学長　　越　智　光　夫
（広島大学マスターズ顧問）

このたび、広島大学マスターズが創立10周年を迎えられましたことを、広島大学を代表して心よりお祝い申し上げます。

広島大学マスターズは、東広島市およびその周辺に在住されている広島大学を退職された教職員有志の皆さまにより、平成18年12月に結成されました。貴重なご経験を活かし、地域の文化および地域の活性化に多大な貢献をされてきたところであります。

地元東広島市では、健康、情報、食品、運動、芸術、歴史、科学、工学など多岐にわたるテーマで毎年、市民講座等を開催され、子どもたちを対象にした「ちびっ子講座」や「語学講座」はなかなかの人気とうかがっております。

広島大学におきましても、教養教育の「平和科目」での講義をはじめ、「留学生短期研修講座」「日韓共同理工系学部留学生予備教育」など留学生教育にも積極的に関わっていただいております。改めて厚く御礼申し上げます。

さて今年は、広島にとって記念すべき年となりました。

カープの25年ぶりのリーグ優勝はもちろんですが、5月27日にオバマ大統領が米国の大統領として初めて広島市の平和記念公園で献花を行い、核なき世界に向けてのメッセージを発信されました。世界平和への新たな一歩を踏み出したと、私は理解いたしました。

原爆による惨禍を越えて昭和24年に開学した広島大学は、初代学長の森戸辰男先生が掲げられた「自由で平和な一つの大学」を建学の精神として、今日まで発展を遂げてまいりました。私は、世界で紛争やテロが頻発する現代にあって、様々な困難に自ら立ち向かう力を持つ「平和を希求する国際的教養人の育成」は、本学に課せられた使命であると考えております。

今年は広島大学にとっても大きな変革の年でした。その1つは、4月に全学的な教員組織として設置された「学術院」です。全ての教員は、専門分野で分類した35のユニットで構成される「学術院」に所属し、そこから学部、研究科、研究院、病院などの教育研究組織に配属される形になりました。

国立大学を取り巻く環境が一段と厳しさを増す中、重要な知的資源である教員の諸活動を大学の資源として捉え、最大限のパフォーマンスを発揮することがねらいです。教育研究組織の枠を越えて、学長のリーダーシップのもとで全教員が大学の教育研究に取り組む新たな体制を構築していきます。

また、広島大学開学の地である東千田キャンパスに、東千田未来創生センターがオープンしました。

霞地区で学ぶ医・歯・薬学部学生の教養教育が行われるようになり、学生の賑わいが少しずつ戻ってきました。さらに、社会人教育の拠点としても活用していく予定です。

8月にはPHP新書「広島大学は世界トップ100に入れるのか」が刊行されました。広島大学が採択された「研究大学強化促進事業」および「スーパーグローバル大学創成支援」タイプA（トップ型）は、「10年後に世界ランキングトップ100以内に入る」ことが目標です。

たやすくはありませんが、「100年後にも光り輝く大学」への道程と考え、全学を挙げて一歩一歩、取り組んでいるところであります。この新書が、これから広島大学を目指す若い人たちや教職員、学生、卒業生、さらにはマスターズの諸先輩方へのエールになればと願っております。

最後になりましたが、広島大学マスターズの今後益々の発展を祈念して、私からのお祝いの言葉とさせていただきます。

10周年、誠におめでとうございます。

# 広島大学マスターズ
# 創立１０周年によせて

# 広島大学マスターズの歩み（創立～2011年度）

金　田　　晉
（広島大学マスターズ　前代表幹事）

広島大学が開学以来の理念「自由で平和な一つの大学」を掲げて東広島市に統合移転した（1995年）、それからほぼ20年。東広島市は統合広島大学の受け皿として市制を敷いて誕生した（1974年）、それからほぼ40年。その両者をつなぐキーワードは「学園都市」あるいはもっと気取らないで言うと、「大学町」。その街づくりが課題であった。

かつては、広島県一の穀倉地帯を誇る賀茂台地が広がり、丘陵の赤松林と赤瓦、居倉づくりの白壁が美しい風景があった。明治以降、旧山陽道沿いに酒蔵のレンガ造りの煙突が林立していた。私は広島大学が移転を決める前に、この賀茂台地の住民となって、その風景を美しいと思った。

風景は少しずつ変貌していった。東広島市には広大の他に近畿大学工学部やエリザベト音楽大学や広島国際大学が開学した。国立醸造試験所（独立行政法人酒類総合研究所）や産総研（国立研究開発法人産業技術総合研究所）中国センターや官民の各種研究センターが集まってきた。同じく国立の研究開発法人の理化学研究所の一部も「生命科学の拠点化」を目指して、2017年度中にはやってくる、という。公私立の中学・高校も新設され、中等教育の環境も整備されてきた。半導体などの先端技術の民間企業も工場立地され、一方で圧倒的な国際的シェアを誇る伝統地場産業もある。

そのような大きな動きの中の、2006年であった。いまだ広島大学と東広島市の間は敷居が高い。組織間の表敬訪問的な交流はあるものの、大学で教育や研究活動を行っている者、あるいはそこで教育を受けている学生、あるいはその大学の諸活動を支えている事務職員たち、その大学を受け入れ、子供を育て、店を開き、生産活動に従事している市民たちの間の、心を開いた交流は行われているだろうか。科学技術のめまぐるしい発達、グローバルな情報が流れあふれて真実が見定められない世相の中で、ほんとうに気を許して自分の経験を伝え合える連帯が育っているのであろうか。大学や研究所や企業や行政に仕事でやってくる訪問者が多い。あるいは私的に当市を訪ねてくるお客さんも多い。あるいは観光のためにぶらりと訪ねてくる旅行者もいる。かれらが、たとえば西条駅を降り立ったとき、「大学町」の雰囲気を感じるだろうか。パリのカルチエ・ラタンとはいかないまでも、私が体験したドイツのゲッティンゲンやフライブルクのような香りがただよわせられないだろうか。雑誌『酒』編集長佐々木久子氏はかつて、西条駅を降りると酒の香りがプーンと匂ってきた、と記した。あたかもそのように文化の香りが漂ってくるようにするには、どうすればよいか。仲間と話し合った。「広島大学OB東広島友の会準備会」の名称で、4回集まった、と手帳にはある。場所は学内の地域連携センター室で、当時同室長で、現在広大マスターズ広島の運営に中心的な役割を果たしておられる松水征夫教授にも会合に参加していただいた。そのようにして発起人会のよびかけにこぎつけた。

（1）

2006年夏9月13日15時から、広島大学マスターズ（以下広大マスターズと略す。）発起人会が同市内のサンスクエア東広島内に設置されていたコラボスクエア（広島大学西条サテライトオフィスと東広島市新産業創造センターの産学官交流拠点）会議室で開催された。出席者20余名。

会員資格は、「以前広島大学に在勤し（非常勤職員を含む）、現在東広島市に在住している者」（会則２）。目的は「広島大学の行う社会連携等各種事業を支援し、大学のある都市としてふさわしいまちづくりに協力し、かつ会員相互の親睦・交流等を深めること」（同上）。

発起人会で一番重要なことは、各自の署名を入れて、会員有資格者に入会をすすめることと設立大会への参加を呼び掛けることである。その呼びかけ文に署名した発起人の名簿を以下に記す。

有本章、安藤忠男、井上宣邦、江口正晃、沖村雄二、金田晉、栗栖良充、黒川正流、佐野進策、塩谷優、菅川健二、難波平人、西川恭治、西村清巳、原田宏司、原野昇、藤井博信、松村昌信、三浦省五、水上千之、宗岡洋二郎、山本義雄、吉田二美恵。

全国にまだないこうした実験的組織の設立にすすんで名を連ねていただいた諸兄姉には、この場を借りてお礼を申し上げたい。

発起人会では、議事は、準備会が用意していた名称「マスターズ」、趣意書、会則、会費、幹事会構成（代表幹事、幹事、顧問）が熱心な討論を経て、決議されていった。事務局は広島大学西条サテライトオフィス内に置かれた。名称は「大学での現役は退いたが、気力と技量は現役並み」を自負してつけられた。

なお、広大マスターズ的組織の設立については、発起人会に先立って、広島大学（牟田泰三学長）役員会で、安藤忠雄（現マスターズ会員、当時広大地域連携センター長）から趣旨説明があり、了承されていた。

幹事等の構成は、設立総会で正式に承認されることを前提にして、以下のようであった。（幹事の役割分担は、準備会以後の幹事会で決められた。）

| | |
|---|---|
| 代表幹事 | 金田　晉 |
| 副代表幹事 | 安藤忠男 |
| 幹事（会計・広報） | 黒川正流 |
| 幹事（総務） | 山本義雄 |
| 幹事〈渉外〉 | 菅川健二 |
| 監査 | 松水征夫 |
| | 栗栖良充 |

また、広大マスターズが広島大学と東広島市の間に架けられた橋という性格であることから、広島大学学長（現職）と東広島市長（現職）に顧問就任の了承を得た。

顧問　広島大学学長　牟田泰三（現マスターズ会員）
　　東広島市長　　藏田義雄

さらに、会則２に定められた会員以外に、マスターズの活動が円滑に進められるように、協力会員の枠を設けた（会則４（２））。協力会員は、原則として当該組織の代表者（現職）にお願いした。

準備会は、設立大会を同年12月2日（土）14：30から開催することを決めて、散会した。

（2）

2006年12月2日（土）14：30－16：30、広島大学学士会館1階カフェ・レストラン「ラボエーム」で、広大マスターズ設立大会が開催された。藏田義雄東広島市長と牟田泰三広島大学学長が顧問として出席され、激励と祝辞をいただいた。参加者は真白い円卓を数人で囲むような座席配置で旧交をあたためながら、会は、終始なごやかに進行した。すでに発起人会で暫定的に承認されていた議題が順次、今度は正式に議決されていった。出席者30名。

第2部に移り、東広島市内に既に私たちの活動の模範となるような先駆的な活動をされて来た二人のOBから先行活動報告をいただいた。西村清巳会員（教育学部）「NPO設立の志－七塚原自然体験活動研究センターの運営－」、沖村雄二会員（理学部）「東広島市自然研究会の歩み－東広島の自然史へ－」。

＜主な他者評価＞

2007年、東広島市生涯大学システム運営協議会に組織加盟。同会発行のパンフレットには、広大マスターズが市民に提供する市民講座、出前講座が登録された。毎年前期・後期に出版される「学習メニューブック」（東広島市生涯学習推進本部＋東広島市生涯大学システム運営協議会発行）に開講講座が掲載される。

2007年10月、宇山地区の住民から「宇山ふれあいまつり」への招待を受ける。

2008年、広島大学校友会に認定団体として加入。卒業生を中心に組織された同窓会や各種団体のほかに、名誉教授や教職員OBで構成される広大マスターズも認定団体第1号として加入した。

2008年、「広島大学マスターズ活用ガイド」（広島大学マスターズ＋東広島市教育委員会編集発行、42頁）発行。

2010年、わが広大マスターズの兄弟組織である広島大学マスターズ広島が、主として広島市在住の広大教職員OBを会員として発足。その設立には、先行組織である広大マスターズが支援した。

2011年11月、広大マスターズは広大学長表彰を受けた。

＜広報紙の発行＞

「広島大学マスターズ通信」創刊号を2006年12月26日に発行。以後、総会、例会、懇親会の案内を第1頁に掲載し、次頁以後に活動報告、会員の近況報告を載せる編集方針で発行してきた。初期に臨時に「広大マスターズ・ポスト」、「広大マスターズ・号外」も発行。

2006年度－4号。2007年度－6号。2008年度－3号＋HMポスト－2号。2009年度－2号＋HMポスト－1号。2010年度－4号＋HMポスト－1号。2011年度－3号。

＜総会・例会の開催＞

総会は年1回開催された。第2回総会（2007年5月26日）。第3回総会（2008年5月31日）。第4回総会（2009年5月30日）。第5回総会（2010年5月29日）、第5回以後総会の後に懇親会が組みこ

まれた。第6回総会（2011年6月4日）。第7回総会（2012年6月2日）、渡部和彦会員を新代表幹事とした新幹事会体制出発。

例会は、見学会を兼ねて各期3回行われた。第1回例会は、2007年1月独立行政法人酒類総合研究所を訪問し、利き酒をたのしみながら、館内を見学した。第2回は西条駅北側の大地面遺跡と国分寺跡の発掘現場見学（3月8日）、第3回は七塚原「高原の家七塚」山菜どりと野外料理（4月21日）。第4回は広島空港等見学（9月21日）、第5回は賀茂泉等酒蔵見学（12月11日）、第6回は生物生産科学研究科付属練習船豊潮丸による広島湾周遊（2008年10月18日）、第7回は賀茂鶴酒造・児玉希望邸見学（2010年2月4日）、第8回は東広島天文台（2010年7月27日）、第9回はサタケ椰子園等見学（2011年2月9日）、第10回は竹原･長善寺と竹鶴酒造見学（8月31日）、第11回マスターズ･ウォーキングの会（9月23日）

＜懇親会の開催＞

2007年から、酒まつりの初日、「ふく政」で懇親会。以後、毎年行われている。2010年以降、総会の後にも、新入会員の歓迎も込めて春の懇親会を開催。2011年2月、サタケへの見学会のあとに早春懇親会も開かれた。

＜東広島市の生涯学習への支援＞

会員による市民講座の企画、講師派遣、出前講座の講師派遣を定期的に行っている。

＜ TSS 文化大学教養講座の開講＞

2008年度以降、毎年 TSS 文化大学で、教養講座を企画し、講師を派遣した。

＜広島大学の教養教育への支援＞

2011年度から平和科目（選択必修科目）開始。＜前期＞平和と人間 A －環境と生物の未来へ－、＜後期＞平和と人間 B －人間と文化の未来へ－。このことによって広大マスターズ広島と合わせると、29開講科目中4科目を、マスターズが引き受けることになった。その他、留学生向けの各種講座への講師派遣。広大マスターズも、設立当初には地域連携に重点をおいていたが、平和科目への参画によって、地域と大学に両翼をのばした活動体制を組むことになった。

（3）

現職を退いて、地域の住民であることの比重を増した一つの大学の教職員が、自主組織を作って、市の地域の文化向上（生涯学習）を支援し、一方で大学の教養教育や留学生への啓蒙教育にも参画するという活動は、他に聞かない。

マスターズの活動は、今年で10年を迎える。成長している。東広島市も市民文化ホールを今年開館したことを手始めに、文化都市建設に向かって具体的な活動をはじめた。マスターズの働く場所はますます増えていると思う。がんばれ、とエールを送りたい。

# 創立 10 周年記念シンポジウム・祝賀会

渡　部　和　彦
（広島大学マスターズ　代表幹事）

「広島大学マスターズ」の創立 10 周年記念行事として、記念シンポジウムと祝賀会が開催された。シンポジウムのテーマは、「学園都市･東広島の近未来を語ろう」でした。東広島市は、広島大学を含め、4 つの大学を擁する学園都市として、多くの学生、教職員とその家族が居住し、外国人留学生も大勢学んでいます。東広島市が、学園都市の利点を生かし、活力に満ちた都市として発展するには、大学と地域、学生と地域等の相互交流が欠かせません。「広島大学マスターズ」は、これまで、地域貢献活動をしてきました。市民の一員として、また大学との関わりの深い団体として、このテーマの下、市民の皆さんと共に様々な課題など語り合いたいと願いました。

戦後、廃墟と化した広島に、「総合大学」の創設に奔走された先達の努力により、新制広島大学が開学しました（1949 年）。建学の精神である、「自由で平和な一つの大学」は、この東広島の地で、ほぼ実現したといえるでしょう。学園都市としての歴史はまだ浅く、今後における大学と市民との協働作業による更なる発展を期待したい。

以下、シンポジウムプログラムの概要を紹介し、簡単な解説を行う。

**概　要**

日　　時：2016 年 11 月 26 日（土）14:00 ～ 17:00
会　　場：東広島芸術文化ホール「くらら」（小ホール）
広島大学マスターズ代表幹事挨拶 / 広島大学学長挨拶 / 東広島市長挨拶
基調講演：小川　　侃（京都大学名誉教授）「都市・文化・大学―自由学芸九科」
シンポジウム：－教育、産業・水資源、地域連携、芸術・文化、観光、etc. －
塚本　俊明（広島大学教授）「賀茂学園都市構想が目指したもの」
河野　憲治（広島大学マスターズ）「東広島市中山間地域の農地と環境をどう守れるか」
小倉亜紗美（広島大学助教）「地域社会で活躍する学生―学生と地域が得たもの―」
金田　　晉（広島大学マスターズ）「東広島の文化と芸術」
コメンテーター：安藤忠男（広島大学マスターズ）、中光　幸（三ツ城自治協議会下見支部学生部会・部会長）、上向　隆（東広島市観光協会専務理事）、槇原晃二（東広島市副市長）。
司　　会：渡部和彦（広島大学マスターズ）/ 総合司会：平田敏文（広島大学マスターズ）
主　　催：広島大学マスターズ・東広島市教育委員会

**解　説**

「基調講演」:

小川侃先生は、哲学が専門。講演では、海外（ドイツ）での生活経験とドイツの７大学訪問経験から、工業大学の優秀さと理系大学における優秀な文系教授陣が在籍する、カールスルーエ工科大学（KIT）を紹介。「文理融合」の重要性を指摘された。昔の日本でも「読み書きそろばん」という形で文理融合がはかられた。優れた健康な市民の養成が大学の使命であり、今日の大学教育においても同様である。西洋中世の自由学芸七科（文法、レトリック、弁証法、算術、幾何学、天文学（地理学を含む）、音楽）は、その例である。現代ではさらに、体育と医学を付け加える必要がある。これは、プラトンがすでに晩年の著作で力説していたことである。オックスブリッジ（オックスフォード大学・ケンブリッジ大学）やチュービンゲン大学などでは、今日でも全寮制で古いタイプのしかし充実した大学教育を行なっている。文理融合の教育の好例である。また、現代のネット社会では、大都市よりも、地方の小都市の大学こそ、研究を深めるのに有利な環境条件がある。

「シンポジウム」:

・塚本俊明先生は、都市計画の専門家。「学園都市東広島」の設計段階から直接携わる。「つくば」とは異なる、大学と地域住民とのより良い交流を念頭に学園都市の建設を目指した。設計段階からの歴史的経過をスライドで解説。「学園都市東広島」の建設が、一大国家プロジェクトであることを、参加者に改めて強く印象付けたに違いない。

・河野憲治先生は、東広島市の主要な産業の農業が抱える深刻な課題を学術的資料から掘り起こして指摘。高齢化の中での作業軽減対策など、自身が地域で取組む除草作業の負担軽減対策など紹介。各地域での営農改革への取り組みの事例も紹介。

・小倉亜紗美先生は、学生と共に、地域との交流活動を積極的に実践。大学は教育・研究と共に市民への知の提供・還元の役割が期待されると強調。福富町での留学生等の地域おこし、西条・山と水の環境機構、光の宴、半尾川の清掃活動など多数の事例を報告。

・金田　晉先生は、東広島芸術文化ホールに続き、市立美術館の建設を控える現在、改めて「東広島市の文化と芸術」発展の歴史的経過をつぶさに検証。東広島から県中央へ発信すべく、「モノヅクリの県」としての伝統を文化・芸術の視点から問い直し、「広島県物産陳列館」開設を提言。

総合討論では、コメンテーター４氏から貴重なコメントをいただいた。

安藤忠男「水資源の活用法」: 自らの実践例から下水処理等完結型水資源活用法の紹介

中充　幸「地域と広大の交流」: 地域住民と学生との組織的な交流モデルの成果紹介

上向　隆「東広島市の観光」: 留学生・海外を視野に入れた観光資源開発を紹介

槇原晃二「広大マスターズと東広島市」: 各講演内容の総括と共に行政の取組について述べた

総　括:「大学が無ければ学園都市にならない」・「大学があるだけでは学園都市にならない」

基調講演者・シンポジストほか

**「祝賀会」**

シンポジウムの終了後、ＪＲ西条駅前の「泉ホール」にて、祝賀会が開かれた。

祝宴は座席での形式で行われた。参加者は、東広島市役所から、広島大学マスターズ顧問（代理）・槇原晃二副市長、津森毅教育長（参与）、天神山勝浩生涯学習部長（協力会員）、前籐英文産業部長（協力会員）、前垣寿男（酒造協会・協力会員）および招待者として、基調講演者の小川侃、シンポジストの塚本俊明、小倉亜紗美の各氏が参加（8 名）。マスターズ会員（31 名）、広大マスターズ友の会（3 名）、小川侃氏の友人で広島大学教授（2 名）の計 44 名であった。

三浦省五幹事が司会を務めた。渡部和彦代表幹事の歓迎の挨拶に続き、東広島市を代表して津森毅教育長が挨拶。牟田泰三（元顧問・元広島大学学長）氏の乾杯で会が始められた。会の開始後、広島大学マスターズ創立当初から現在までの 10 年間を振り返るスライドが上映された。其々のジャンル別に編集された数々の想い出の場面が、参加者に披露された。市民講座、出前授業、講演会、海外研修、懇親会、ウオーキング大会等、広島大学マスターズの幅広い活動が改めて認識された。

祝宴は、時間の経過と共に盛り上がりを見せ、席を入れ替わりまたは、立って数人ごとに歓談するなど、相互の交流が深まる楽しい会となった。中締めの挨拶は、金田晉氏（元代表幹事）が行った。

# 広大マスターズ創立１０年に寄せて

**清水迫　章　造**
**（広島大学マスターズ協力会員・前広島中央環境衛生組合副管理者）**

広島大学マスターズが創立されて早や１０年が経過します。広大マスターズがユニークなポリシーを持つ知的集団として地域に果敢にアプローチされている姿は、東広島市の都市づくりが４０年余を経て「学園都市らしく」なったことを象徴するものであり、東広島市民にとっても誠に喜ばしい限りであります。心からお喜び申し上げます。

平成１５年の教育委員会への異動を契機に、私は生涯学習施策に直接関わる機会を得ました。しかし生涯学習が有する意味を理解するのに少々時間がかかりました。だが「生涯学習とは何か」について自分なりの理解が深まるにつれて、必然的に30年にわたって自ら考えてきた「全国に大学のある町はたくさんある。しかし真に学園都市と言える町は・・・」というテーマを、生涯学習との関わりから改めて考えるようになりました。

一方、大学においても地域と大学の関係については大きなテーマになっていたようで、広島大学においても公開講座などを継続的に展開されていました。平成１５年当時の状況は、広大を退官されて安田女子大学に在籍されていた池田秀男先生（広大マスターズ会員）の『安田大学生涯学習論集（第６集：2003）』の「第三世代の大学と生涯大学システムの構築」と題した論文などでも伺い知ることが出来ます。

当時、生涯学習では静岡県の掛川市が象徴的な存在で先駆的な施策を展開されていました。長寿化が進む社会環境も重なって生涯学習施策は全国的に重要視され、中でも地域に出向く出前講座には強い関心を持ちました。東広島市における出前講座は平成１７年４月にスタートしましたが、講座の構成は講師陣に左右されます。そして他の自治体には無いユニークな講座を希求することと学園都市の姿を重ね合わせたとき、必然的に大学の有する知的資産との連携が視野に浮かびました。

では大学にどうアプローチするかという中で、現職の先生方は研究等で時間的制約が多いことは承知していましたので、退官された教授の情報について当時交流のあった溝上先生などにお聞きしました。しかし、総じて同じ学部でお付き合いがあった人の情報しか分からないとのことでした。事務局に問い合わせても同様で、退官後に各教授がどうされているのか把握されていませんでした。そこで、平成１７年の暮れから１８年の春頃にかけてだったかと思いますが、以前から交流のあった金田晉先生に東広島市に居住されている退官教授の把握と地域活動に関わりを持っていただくことの可能性についてご相談しました。

金田先生は、昭和４８年２月の広島大学の統合移転決定に先駆けて、当初黒瀬町に移り住まれていました。東広島市の都市づくりの初期段階から東広島市都市計画審議会会長などの要職も務められ、昭和５５年に現在の西条町土与丸に居を構えられました。そのため東広島市の都市づくりの変遷過程

は詳細に承知されている方です。移転が決定された当時、懐疑的な批判が大学内には多々あり、先生の多くが広島市以西へ居住されていると聞いていましたので、積極的に新たな地に移り住まれた行動を市職員としてはとても嬉しく思っていました。そうした長いお付き合いの中で相談させていただいたものです。

数か月後に金田先生から「年内に組織を立ち上げる。名前は広島大学マスターズだ。」とのお電話をいただきました。同年４月からスタートしていた「東広島市生涯大学システム」の主要なメンバーとして活動すると言われていました。

「東広島市生涯大学システム」は、平成１２年に「東広島市生涯学習推進会議」を設置して、それまでの施策の成果をもとに次のステップに向けて作業した成果でした。池田秀男先生が会長をされ、小池源吾先生もメンバーでした。その提言に沿って平成１８年３月に発表したプランが「市全体を学びのキャンパスに」を理念とする「生涯大学システムアクションプラン」です。東広島市の地域資産を活用してエリア全体を学びの場とする計画でした。

このように当時大学が抱えていた課題と東広島市が探求していた課題の接点が存在していたことが、少なからず広大マスターズ誕生の動機づけになったと思っています。広大マスターズが発足した時のメンバーは約３０名程度だったと記憶していますが、私も協力会員として名を連ねさせていただきました。ここで銘記しなければならないことは、メンバー各位が知的集団としてまとまり、地域に貢献するために行動しようという強い使命感を持たれていたことです。これが実現の要だったことは間違いありません。今日においても敬意の念を強く抱いております。実際、この１０年、マスターズの先生方は、市民講座や出前講座や市の文化施策の指導などに大きな役割を果たしてこられました。

少子高齢化やグローバル化などにより日常生活が大きく変化している中、東広島市は成長し続けてきました。そして、今日では、都市としての熟度、あるいは品格形成につながる施策が目立って増えています。ソフト面では広大マスターズの活動が他の自治体との比較では筆頭であり、ハード面では庁舎、芸術文化ホールの建設に加えて、新美術館の建設も具体化しつつあります。

特に芸術文化ホール「くらら」は、とりわけ長寿社会のもとでの都市づくりで多大な貢献をし、その盛況ぶりは、東広島市のイメージ向上や東広島市に居住する充実感を醸し出しています。加えて、新美術館がオープンすれば、より生活の満足度は高まると思われます。また、以前から科学技術の芽を育てる青少年科学センターの実現を期待する声がありますが、文学面なども含めた総合的な知的資産を生かす工夫も一層求められてくると思います。広大マスターズが担っている役割は、これからはもっと重要になってくるでしょう。

加えて、広大マスターズについては、マスターズのもつ機能が大学間の垣根を越えて連携し、東広島市民や東広島市に拠点をもつさまざまな公・民の研究、商工業機関等とコラボしてゆくことが学園都市建設には不可欠です。これらを克服した延長線上に全国一の学園都市の姿があると思っています。

# 広大マスターズ創立にあたっての余話

菅　川　健　二
（広島大学マスターズ会員）

広大マスターズが創立されてから、早くも 10 年が経過した。星雲状態から創立に関わり、今日に至っているものとして、若干の思い出話をお許しいただきたい。

まず、わたくしの経歴であるが、大半の会員の皆さんと異なって、大学卒業後、旧自治省（現総務省）に入省し、広島県庁等長年国と地方の行政に携わり、一時国会議員を経て、地元東広島に帰郷したものである。その際、出張旅費のいらない実務経験者として広大法学部客員教授に誘われたのが、広大との直接のご縁の始まりである。

事の始まりは、今から 10 年余前、偶然、親交のあった金田晉先生と久しぶりに電車の中で出会い、西条駅前のすし屋で飲んだ日に遡る。よもやま話の中で中心となったのは、広大と地元東広島との関係で、折角、広大という知的集団が移転してきても、地元との交流が少ないのではないか、市としても「学園都市」を標榜しているが、西条駅に到着しても、大学がどこにあるか案内板ひとつないではないか、大学としても、市民との交流をどの程度進め、生涯学習にどの程度役立っているのか等々延々と怪気炎を上げた記憶がある。話が佳境に入ると、やや理屈っぽくなってくる。

傍観者として批判するのは簡単であるが、広大としても地域との連携事業を重視しているし、東広島市の行政当局としてもいろいろな形で広大にアプローチしていることも事実である。ただ、組織対組織となると、とかく形式的、硬直的になりがちである。振り返ってみると、双方に足場を持ち、現在は組織を離れて自由な立場にある我々が相互の懸け橋となって、お互いの血流をスムースにするとともに、我々自身、長年蓄積してきたノウハウが双方にお役に立つこともあるのではないか。そのためには、我々個人が活動するのも大切であるが、同志を募ってグループで活動するほうがよりパワーアップするのではないかという結論になり、早速行動を開始しようということになったのである。

幸い、金田先生が広大に幅広い人脈を持ち、先生を中心として、安藤先生等数人が、発起人となり、主として広大教職員 OB に参加者を広く募集することとした。わたくし自身は、会則等組織づくりのお手伝いをすることとなった。当初の主な課題は、1 名称、2 会員の範囲（主として東広島市の在住者）、3 活動内容、4 活動費（出資金）等であった。その際、組織の性格として、NPO 法人化の検討もしたが、事務手続き等が煩瑣になるため、当面は見送りすることとした。今後、活動の充実強化に伴い、再度、検討されることを期待したい。また、組織の足場を支えるものとして、広大、東広島市のトップの顧問就任、広大の事務所提供、東広島市教育委員会の実質的な支援を得たことは意義深いものと思う。

その後、広島地域の教職員 OB の参加問題があったが、相互の地域の支える基盤が違うことから別組織としてお互いに切磋琢磨することとなったことは良かったのではないだろうか。

また、渡部代表幹事就任後、サポーター組織として「友の会」が発足したことも、マスターズの活動の外延的拡大に寄与するものとして期待したい。

以上、思いつくまま駄文を書いたが、広大マスターズが当初の目的に沿ってほぼ順調に発展していることは喜ばしい限りであり、今後、１０周年を契機に更なる拡大発展を願うものである。

# 広島大学マスターズと地域貢献

髙　田　忠　彦
（広島大学マスターズ会員）

今年度、広島大学マスターズが創立されて10周年を迎える。筆者は2006年3月に退職後、本会のメンバーとなった。広島大学退職後も、引続き産学連携センターに属し、2013年3月まで勤務したが、その間、マスターズの種々の事業には積極的に関与してきた。大学の大きなミッションは、①知的文化の創造（研究）、②知的文化の継承（教育）及び③知的文化の活用（社会貢献）である。大学は、これまで主として①と②により人材（即ち、学生）を育成し、社会に送り出してきたが、平成16年度、国立大学法人化後、③のより積極的な社会貢献が求められるようになってきた。広島大学は社会貢献を第3の柱として、この社会貢献を推進しているのは周知のとおりである。筆者は、民間の会社を退職して広島大学に赴任してから、研究・教育に貢献しながら産学連携の活動を推進してきた。産学連携教育に関しては、学部生に対して、起業家マインドを育成するベンチャービジネス教育（VB論）や理工系院生に対しては、技術を経営に活用するために、基礎的な知識を教育する『技術経営教育』（MOT）にも注力してきた。又、地域企業人に対して、多くの関連の教育を行ってきた。筆者自身がこのような背景を持っているがゆえに、広島大学マスターズがメインの事業として、地域貢献に力を入れるのはよく理解が出来る。

筆者自身の地域貢献に関する具体的な活動は、広島大学マスターズ市民講座（2008年7月）、TSS文化大学（2010年12月）及びちゅーピーカルチャーセンター東広島大学（2015年9月）の講演を上げることが出来る。マスターズメンバーの先生方に比較すると必ずしも、その数は多くはないが、若干の貢献をしてきたように思う。広島大学で、研究や教育に従事してきた広島大学マスターズのメンバーが、退職後も現役時代のキャリヤーを生かすことは、直接社会貢献することだけではなく、自己研鑽の場としても活用することが出来る貴重な機会ともいえる。このような場を大いに利用すべきと思う。しかしながら、経験の多いメンバーの先生方の講義は、地域の方々がじゅうぶんに利用されているとは言えず、もったいない気がする。

一方では、広島大学マスターズはメンバーの交流の場、健康維持や海外への研修旅行など、いろいろな事業を提供している。筆者は、昨年と今年の研修旅行に参加した。特に、今年度訪問した大連・旅順は、筆者の出生地を訪ねる記念すべき研修旅行となった。

広島大学マスターズのミッションは、自分自身の専門領域を生かしてその知識を地域に提供し、地域社会に貢献することであるが、同時に、研修旅行を通じ見聞を深め、マスターズメンバーと交流することにある。退職後の貴重な時間をいかに過ごすかは、人生の生き方に通じるものと思う。残りの人生を有意義に過ごすために、マスターズのメンバーとなり活動することも、選択肢のひとつになるものと思う。

広島大学マスターズ設立10周年を迎え、所感の一端を述べ、次の20周年に向け更に、発展していくことを期待したい。